

小論文には何を書くべきか —「提案」する文章の意義と作成方法—

小 野 泰 央*

(2007年11月30日受理)

はじめに

しばらく前にジョビジョバというコントをやるグループがいて、その作品のなかで「三つの木」というものがあった。これは、学校の朝礼という設定で、まず校長先生が台に立って次のような訓示を始める。

夏休みを前にして君達に「三つの木」をあげよう。
まず「元気」。元気とは、…

そうして、「やる気」「根気」と説明を続けていく。つまり「三つの木」というのは、「元気」「やる気」「根気」にそれぞれ「き」がつくことを「木」に喩えているのである。そして、校長先生の話が続くうちに、その三つは「元気」「やる気」「根性」と「き」がつかない語が混ざってくる。それがさらには「元気」「思いやり」「根性」となり、しまいには「愛情」「思いやり」「根性」とまったく「木」がなくなってしまう、最後に校長先生は、次のようにまとめる。

この三つの木に水をやってどんどん成長させて下さい。

この話がコントになるのは、「三つの木」などの語呂を合わせる話を誰も聞いた覚えがあるという点、そして、その大切な語呂を合わせたはずの言葉が最後には語呂が合わなくなるというところにある。

つまり、はじめから語呂を合わせる必要もなく、さらにそれらの語自体にもなんら特別の意味もなかったということである。

この話は、そういう学校教育における我々教員の訓話を諷刺している。これは、何も訓話だけでない。書く文章にしても同じである。学生が、集会で話を聞かなかったならば、また機関紙を読まなかったならば、その発信側に問題があるのである。つまり、通り一辺倒な内容あるいは言葉を取り上げて、その重要性をやはり抽象的に話したり、書いたりしている時には学生は、それに興味を示さないのである。

そのような発信が無意味なのは、無駄な時間を過ごし、無駄なインクと紙を消費しているばかりではない。それ以上に学生が、将来、そのような話と文章でその場をしのげばいいのであるという気持ちを起こさせてしまうのである。

現代の学生が最も苦手とするところは、自らをさらけ

出すことである。現在、私が高専で行っている文章表現の授業、4年「国語演習」・専攻科1年「国語表現演習Ⅱ」において、学生がまず書いてしまう文章は、概要説明や感想が多くを占め、さらに往々にして典型的である。

それは、我々日本人が、初等・中等教育において、所謂「感想文」というものを書かされつづけてきたことに原因がある。感想というのは、対象に対する自分の気持ちを書くことで済まされ、それが今後どのようなものであるべきかということを書く必要がない。例えば次のごとの感想である。

「ゴミを捨てないように注意したいと思います」
「友達を大切にしたいと思います」
「環境について、これからはしっかり考えていこうと思いました」

自分はそう感じたのだといわれれば、それまでのことで、だから批判しにくく、そこから議論は生まれない。教育の場がそうであるので、社会人になっても、依然として会議でも感想が飛び交う。

「子どものために我々保護者が親身になって考えてあげるべきだと思うのです」
「社会を明るくするために一生懸命がんばります」
「一人一人が経営者になったつもりで乗り切らなければならない」

これらの結論からは何も生まれない。そもそもこのような感想は、いくらでも嘘がつけてしまう¹⁾。

本稿は、このような傾向が生まれる背景を押さえた上で、高等教育機関における小論文とは、何を書く必要があるのかを論じるものである。

一、高等教育機関以前の作文教育

教育機関においては、実際にどのようなことを目標にしているのだろうか。小学校学習指導要領「国語」〔第5学年及び第6学年〕の「B 書くこと」には、

ア 目的や意図に応じて、自分の考えを効果的に書くこと。

とあって、書く対象は「自分の考え」である。解説では、「相手の立場からの意見をも踏まえて説得できるように工夫することも求められている」とするから、それは単なる感想ではないだろう。

*人文科学系・国文学

中学校学習指導要領「国語」〔第2学年及び第3学年〕の「B 書くこと」には、

ア 広い範囲から課題を見付け、必要な材料を集め、自分のものの見方や考え方を深めること。

とあって、「自分のものの見方や考え方を深めること」とある。小学との違いは、「深める」というところにある。解説では「自分のものの見方や考え方を深めることができ、書くべき内容を作り出すことができるようになる」とする。「作り出す」というところに創造性を見ることができる。

さらに高等学校学習指導要領「国語総合」の「B 書くこと」の「自分の考えを文章にまとめること」に加えて、「現代文」では、

エ、自分で設定した課題を探究し、その成果を発表したり報告書などにまとめたりすること。

「自分の設定した課題」を「探求」とすることは、自ら問題を見つけ出し、それを深めることを意味する。解説では、「参考となる資料を調べたり、現地にでかけて関係者に取材したり」とするから、より自主的な調査ということになる。

このように小学校の「自分の考え」を中学校では、さらに「深め」、高等学校では、「自分で設定した課題を探求」ということには、感想文ではない思考力を要求しているはずである。

ただし、実際には感想を書く傾向にあることも事実である。『作文と教育』（日本作文の会編集、百合出版）平成13年5月臨時増刊号は「子どもが「ウソ」を書くとき」であったが、そのなかで、「アンケート『私の書いた「ウソ」』で「思っても、感じていなかった」では、次のようなウソが載っている。

見学とかいった後、次の日に作文か日記をかく時私はいつも最後の文に『とってもいい勉強になりました』と書きます。（6年・女）

1年の時は、お年寄りを大切にみたいなことを、大っきく、大っきくしないと、思ってウソかいた。（中1年・女）

この「勉強になりました」やそれに類する「楽しかったです」さらに、「大切に」やそれに類する「真剣に考えなければなりません」などは、感想文の常套文句である。

高校入試の小論文にも次のような感想を求める設問がある。すべて平成18年度のものである（以下同）。

宮城県「「思い出の食事」について心に残ったことや考えたことを自分の体験を含めて」

群馬県「あなたが心豊かに生きるために大切にしたいと思っていること」

都立両国「「峠」という題で、あなたの生活の中で考えたり感じたりしたこと」

和歌山県「あなたが感じたことや考えたこと」

愛媛県「考えたり感じたりしたこと」

沖縄県「「マナーの大切さ」という題で、あなたの意見や感想を書くこと」

一応は「考え」を求めているが、同時に「感じたこと」「思っていること」を書く余地を残す。入試問題にも作文にも「大切に」等のことばがどうやら曲者である。

大学入試にしても次のごとく、依然として感想を要求する出題もある。すべて平成18年度入試のものである（以下同）。

文教大日本語日本文「季節の変化をどういうところに見出しているか」

順天堂大医「写真を見て思うこと」

神奈川大学国際「日本語と中国語における「文化」ということばの意味の違いおよびその社会的、時代的背景について感想」

東海大学情報デザイン「若者の「本離れ」についてどう思うか」

加えて、意見を要求する出題もある。

文教大中国語中国文「生きることの意味について、あなた自身の意見」

東洋大生命科学「バイオテクノロジーに対するあなたの意見」

東洋大インド哲「あなた自身の意見」

日本医科大医「文中の「医学の世界では、・・・認められる感性をも求められる」に対するあなたの意見」

法政大哲「「カントが永遠平和の実現のために提示した主張について、あなたはどのような意見をもつか」

関東学院大比較文化「あなたの意見」

これらは、自分の感想を書くことが可能となる。すなわち「～と思う」「～すべきである」等の結論である。そしてそれは「大切に」とか「頑張る」とかいった、やはり、心に問い掛ける内容の答案を作成させてしまう。

二、作文指南書—日本語文章能力検定の問題

近年、日本人の文書能力も問題となり、それに対応するかのようになり『日本語文章能力試験』（日本語文章能力検定協会）なるものが行われるようになってきた。「大学卒業程度の総合的国語力を身につけ、それに伴う論理的思考力に裏づけされた総合学力をみにつけること」を目標とした2級の「徹底解明」において、次のような設問とそれに対する模範解答が記されている。

まず、インターネットに関する文章を提示し、その問題として次のように記す。

この文章を読んで趣旨と内容を捉え、問題となっていることがらに関する論説文を次の条件を必ず守って書きなさい。

この場合、そもそも「論説文」の意味が不明瞭である。「批評して」それに対する「自分の考え」ということであろうか。模範解答は、次のごとくである。最終形式段落のみ引用する。

自分の未来は、自分で開発していくべきである。人生ではさまざまな場面で意思決定を行わなければならない。毎日、本を読むか、運動をするか、昼寝をするかなど、選択が可能な場面で意思決定をしなければならない。その意思決定がどうであるかによって、人生は定まっていく。だから、子どものころから、自分で問題を発見し、解決する技術と能力を身につけることが必要である。これによって自分自身の人生を切り開くことができるし、社会の進歩にも役に立つ。便利だからといって、コンピュータが提供するものに過度に依存すべきではない。

検定する協会が作成する模範解答であるから、その検定の趣旨に相違ないが²⁾、結論が、「便利だからといって、コンピュータが提供するものに過度に依存すべきではない。」というのでは愕然とさせられる。

「べき」という言葉が二度使われているが、この言葉こそ、論文における「だろう」と同じ言葉で、最も問題である。総ての議論が、「すべきである」で終わってしまったら、議論をした意味がない。「努力すべきである」「注意すべきである」ということを何百回唱えたところで、事態は改善されない。多くの日本の会議が陥っている結論である。皮肉にも、問題はこれも重複している語、「意思決定」である。その意思決定は、喩えとして挙げられている「本を読む」「運動をする」「昼寝をする」かのような漠然としたものではなく、

コンピュータに過度に依存しないためにはどういうシステムが有効か

でなければならない。それを提案して、決定していくことこそが、「意思決定」なのである。

もう一つ「演習」がある。学校給食のこれまでの経緯と現状が語られている文章で、先の問題と同じく「問題となっていることがらに関する論説文を次の条件を必ず守って書きなさい」という問題である。それに対する「作成例」が二つ示されている。まず「作成例1」は、冒頭に

学校給食は、なかなか合理的なシステムだと思う。という「なかなか」という曖昧な程度をあらわす副詞をつかって「と思う」という感想から出発する。

そして、その理由として「みんなが同じものを食べる点にある」とし、それによって「一体感を生み出し」、「クラスのまとまりを作り出す」「学校生活が楽しいものになる」という効果が期待できる」とする。

二つ目は、「共働きの親にとって」「便利なもの」ということを挙げている。さらに重要な理由として「栄養の問題」を挙げている³⁾。

そして、その結論として次のごとく締めくくる。

給食制度は、かつて、子どもたちの栄養不良を解消する手段として大きな意味を持っていた。しかし、近年は、それよりも、ともすれば崩れがちな子どもたちの栄養のバランスを整える点で重要な意味を持っている。そうしたことを考えると、学校給食の価値は依然として高いと言えよう。

問題本文の内容を言い換えて、さらに自ら指摘した「栄養の問題」を繰り返しているだけで、その上で、「学校給食の価値は依然として高いと言えよう。」という感想でまとめる。本文の内容を言い換えて要約し、最後に感想を付け加えるというのは、話の内容をながながと書き、最後に教員に喜ばれる感想を書いて、字数稼ぎをする小学生の常套手段である。

「作成例2」になると「評論文」の意図がわかりやすい。つまり、反論しているからである⁴⁾。さらに結論は、給食が「他人と一緒にだと安心できるという横並び主義」を助長していることを示し、

学校給食が、そんな精神を育てる妨げに絶対になっていないと断言できるだろうか。

とあやふやな表現で結ぶ。

さきに「作成例1」の冒頭に触れ「なかなか」という曖昧な表現について触れた。それは、合理的なシステムであると断言することがはばかれる心理からである。今度は、「絶対に」という確実な表現が使われているが、それは、筆者が批判する対象についての修飾である。この世の中にいったいどれほどの「絶対に断言できること」があるかは疑問であるが、その「絶対に」もまた、自らに感想を肯定化するための逃げ道になっているのである。二例の作者は同一人物であると考えられるが、ここに学生が具体性をもって持論を展開できないことと同じ心理が見られるのである。

話し言葉でもそうである。樋口裕一氏『頭がいい人、悪い人の話し方』（PHP 新書、平成17年）では、頭が悪い話し方のなかで、「きれいごとの理想論ばかりを言う」を示し、

本を読んでも、「美しい心をもって懸命に生きている貧しい人々に感動した」などといった感想を漏らしたりする。

とある。まさに学生の感想文と同じである。

作文指南書にも感想文を想定するものもある。辰濃和男氏『文章の書き方』（岩波新書、平成6年）では「意欲一胸からあふれえる思いを」と項目立てをし、「胸にたまっているも混沌としたものが、しだいにある形を整えてくる。」として「思いが整い、言葉が整ってくる、という過程が大事です」とするのは、そもそも感想文の過程である。

多くの文章について論じた書物は、それでも論理的に書くことを目指す。木下是雄氏『理科系の作文技術』

(中公新書、1981年)は「若い研究者・技術者と学生諸君」を対象としており、新たな「提案」は大前提で、それをいかに事実に基づいて書くかを強調する。「現代の社会が必要とする情報を正確に伝える文章を書く訓練を受けた人はあまりいない」という樺島忠夫氏『五つの法則による十の方策 文章表現法』「一 日本人はどんな文章に価値を与えてきたか」「日本人の文章観」(角川選書、平成11年)も、正確に伝えることを示す。ただし、それらは、書き方に力点がある。

尾川正二氏『文章の書き方』(講談社現代新書、昭和47年)では第2章に「何を書くか」が設けられている。その中身は「不用意な第一歩」「避けた長文によるスタート」「よけいなことは書かない簡潔さ」等、やはりどのように書くかで終わっている。

書く内容を問題としても、例えば、野口悠紀雄氏『「超」文章法』(中公新書、平成14年)が「伝えたいことをどう書くか」という副題を示し、その「伝えたいこと」を「ためになり、面白いメッセージか」ということとするように、つまり、「どのように書くか」ということを問題とすることが多く、さらに「何を書くか」ということを問題とした文章指南書は少ないのである。

三、小論文には何を書くべきか

小論文には、何を書くべきなのか。それは、「感想文」ではなく、学習指導要領が言っているように「自分の考え」である。

高校入試の小論文でも「自分の考え」を要求する次のとき問題が一般的である。

青森県「水について」「自分の考えを書くこと」

秋田県「条件にしたがって、意見文を書きなさい」

栃木県「わたしたちが生きていく上で[A]は必要か」というテーマについて意見文」

大学入試も実は、「自分の考え」を述べる問題が、例えば次のごとくある。

文教大英米語英米文「職業選択のことをどのように考えたらいと思うか」

文教大情報「「共同体のルール」についてあなたはどう考えるか」

青山学院大仏文「「標準語」というものは実在するのか。あなた自身の考え」

大妻女子大児童教育「「育てる」「鍛える」という2つのことばについて検討し、具体例をあげながら論じなさい」

東洋大経済「あなたは今後の日本経済にとってどちらの雇用形態がより望ましいと考えるか」

早稲田大二文「「暴力を抑える精神の営み」としての「倫理」について、あなたの視点から考え」

鶴見大歯「「職業」についてあなたの考え」

北里大看護「筆者の主張に対するあなたの考え」

杏林大医「「資源のリサイクル」についてどう考えるか」

杏林大医「個人の富と幸福は殆ど関係がないについてどう考えるか」

「日本社会における性差別」についてどう考えるか」

順天堂大スポーツ健康科学「1語選び、それを主題(テーマ)にしてあなたの考え」【格差社会、サブリメント、構造改革、人災天災、外国人力士、アクシデント】

清泉女子大地球市民「1つを選んで、それについて自分の考え」【外国人労働者、テロリズム、少子高齢化と人口爆発】

東洋大哲「「見えるものと見えないもの」というテーマで自分自身の考え」

東洋大—国際地域—国際地域「自然とのつきあい方について何を考えるのか」

東洋大国際観光「観光に関する産業で働くために必要な能力や知識などについて、あなたの考え」

法政大キャリアデザイン「「コミュニケーション」と「生きる意味」について自分の考え」

神戸女学院大総合文化「機械工業生産されたものについてあなたの考え」

神戸女学院大文—英文「自由の侵害(不当な拘束・制限)あるいは平等の侵害(差別)を具体的に引き上げ、考え」

ではその「自分の考え」とはどのようなものである必要があるか。多くの作文指南書が言うように論理的であるということが第一であろう。さらに、その論理的に「自分の考え」を書く場合、どのようなことを書くべきなのか。それは、学術論文というものを思い出せばいい。研究者が、参考文献を列挙したり、他の論文を引用したりするのは、先行研究とその研究がどう違うかを明確にするためである。学術論文とは、すでに示されていることは書けない。つまり、新しいことを書かなければならない。それは、新たな発見と言ってもいい。

樺島忠夫氏『文章構成法』(講談社現代新書、昭和55年)「価値ある内容とは」では次のことをあげている。

人があまり知らない知識、知ることが必要な事実である。

多くの人は、まずここを考えない。自分に正直なあまり、知られていることを書くのは日記と同じである。

たとえ既に知られている事柄であっても、それに対する「新たな分析」を行った内容も価値がある。多くの研究論文がそうである。樺島忠夫氏はさらに次のように示す。

すでに知られていること、説明がついている事実・出来事に対して、新しい解釈・見方・考え方を提出

し、それによってはっきり分かってくることや新たに生じる問題を示すことも価値がある。

先の入試問題、特に大学入試においては、もちろんこれらに対して、周知の結論を出すことも可能であろうが、それは評価されていかないであろう。おそらく、学習指導要領の「課題を探究」することが要求されているはずで、そこには、独自の新しい視点が必要となってくる。

四、高等教育機関の小論文には何を書くべきか

では、高等教育機関の学生、つまり大学入試を経た学生に最も必要なことは何か。それは、社会が望んでいる人物像である。中央教育審議会における平成17年1月28日に出された「我が国の高等教育の将来像」の答申では、

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」(knowledge-based society)の時代であると言われている。

として、「知識基盤社会」が強調されている。そのうえで、

「知識基盤社会」においては、新たな知の創造・継承・活用が社会の発展の基盤となる。そのため、特に高等教育における教育機能を充実し、先見性・創造性・独創性に富み卓越した指導的人材を幅広い様々な分野で養成・確保することが重要である。

として、「知識基盤社会」に対応するためには「新たな知の継承・活用が社会の発展の基盤となる」「先見性・創造性・独創性」を指摘する。まさに「新たな」「提案」である。

平成17年9月5日の「新時代の大学院教育―国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて―」の答申で、「1大学院に求められる人材養成機能」とすることにも、

今後の知識基盤社会において、大学院が担うべき人材養成機能を次の四つに整理し、人材養成機能ごとに必要とされる教育を実施することが必要である。として、やはり「知識基盤社会」が強調されており、その具体的な方向として、

①創造性豊かな優れた研究・開発能力を持つ研究者等の養成

が筆頭に挙げられている。

これは、企業側の要望とも一致している。時を同じくして「社団法人経済同友会」の教育問題委員会委員長浦野光人氏(ニチレイ取締役社長)の「教育の視点から大学を変える―日本のイノベーションを担う人材育成に向けて―」と題する「提言・意見」(平成19年3月1日)では、これからの社会で求められる力とは、「社会の中で自らの能力を活かし、挑戦するための基礎となる力や

意欲など」とした上で、

知識や情報を吸収することは重要だが、その量ではなくて、むしろ情報・知識を適切に活用する洞察力、新たな価値を創出する力、他者と協働する力が重要になってくる。

とする。「知識を活用する洞察力」であって「あらたな価値を創造する力」であり、それを「他者と協働」して運用していくということであろう。最後の「協働」はひとまずおいておくとして、ここでもやはり「新たな」「創出」が要求されている。

本多勝一氏の『日本語の作文技術』(朝日新聞社、1976)において、かすかに策についての言及がある。本多氏は詳細な叙述方法について解説した後、「作文「技術」の次に」において、具体的事実について触れ、

このように具体的な事実を書いて、そのあとで交通事故の現状がどうなっているか、その救済にはどういうことをすべきかを、やはり具体的な書き方で訴えてゆく。

とするが、ここで問題にしたいのは、「その救済にはどういうことをすべきか」ということである。ただし、同書ではそれを深めて書かれていない。

高等教育にそのことが望まれているのであるから、それ以前の教育もそこに集約していかなければならない。実は、高校入試の小論文問題においても、未来に対する提案を求める問題がある。

山形県「将来大人になったときに、どのような大人でありたいと思いますか」

三重県「環境を守るために私ができること」

山形県も三重県も個人についてのことなので、感想に走ることも可能であるが、根拠を示して客観的に論じると、今後あるべき日本人像になっていく。調査したなかで、最も高度な設問は、次の徳島県だった。

徳島県「環境問題の解決には、リサイクルのほかにも、さまざまな取り組みが必要である。(中略)環境に対するあなたの考えを<条件>A～Dにしたがって書きなさい。

参考資料として示された、

ア、物を大切にする知恵で「ごみゼロの社会」を目指しましょう。

イ、私たちの誇りである「清らかな水と豊かな緑」を守りましょう。

ウ、県民みんなが「環境にやさしい暮らし」を心がけましょう。

という三つの憲章がそれぞれ心に訴えかけるものであることが気になるが、「必要である」「取り組み」に対する「あなたの考え」となると、それは政策の提案ということになる。

このような提案を求める大学入試の小論文試験も見られる。次のごとくである。

慶応大経済「説得的な反論を加え、その上で、そうした問題を解決するのにどのような対策を社会的に講ずることが望ましいのかを模索しなさい」

北里大医「歴史的な転換期・変革期に再構築すべき教養」という題で小論文を作成しなさい」

上智大教育「あなたの理想とする教育の方法について説明しなさい。その理由についても述べなさい」

津田塾大国際関係「文章の著者は、このよう状況は変えることが出来ると考え、様々な問題提起をし、それらに対する解決策を模索している。あなたならどのような問題があると思うか。問題を1つ提起し、それを解決するための方法を述べなさい」

津田塾大情報科学「携帯電話の利用についてはさまざまな問題がある。問題点を1つ選び、その解決方法を日本語で述べなさい」

東洋大社会「元気な人を応援し、より活躍できるように支援するには、①どのような「考え方」をしたらよいか、②その考えを推進し、実現するためにはどのような「具体的方策」が考えられるか。③それが実現した時には、どのような効果が期待できるか。以上の①～③にわけて「考え方」「具体的方策」「効果」の見出しをつけ、まとめよ。

早稲田大スポーツ科学「これからのスポーツのあり方について考えるところを述べなさい」

神奈川大国際「これからの国際文化交流のあり方についてあなたの考えを述べなさい」

早稲田大法「日本語における外来語は今後どうなっていくのか、またどうなっていくべきか、あなたの考えを述べなさい」

鶴見大文文化財「文化財を一つ取りあげて（中略）今後はどのようにして守り伝えられていくべきか、あなたの考えを述べよ」

甲南大理工機能分子化学「スペースシャトル事業をはじめとする人類の宇宙での活動に対して、今後、どのような点でさらに貢献しうると考えられるか。化学反応や物質・材料などの観点から述べよ」

大学での卒業研究というものも、新たな成果を発表する場であるし、例えば、短期大学生や高専生が目指すところの編入試験における問題も、次のごとくである。

神戸大農学「農業問題の解決にどのような貢献」

群馬大社会情報「人が他者に何ごとかを伝えようとするときの困難さへの対処」

富山大言語学「英語を第二公用語とすべきだとする議論」

これらはみな未来見向けた開発能力を問うている。就職活動時の「志望理由」にしても、それは将来の展望を書くはずで、さらには、社会における問題解決において

重要なことも、善後策であることはいうまでもない。

日本語表現が、「書くこと」「話すこと」を問題にする時に、実は、社会科学や工学や人文科学などの具体的な題材があつて初めて実践できるものなので、裏を返せば、それらの全ての学問は、日本語力という下部構造なしには成り立たないものなのである。ここに文学部以外の学生に日本語を教育する必要性と意義がある。

つまり、論理的に考えなければならないことは、つとに言われているが、その「どのように」ということの前に「何を」ということが重要ではないか。いや、文体がその内容ときても切り離せないのと同じように、「どのように」とは「何を」ということと、平行して問題にしなければならないことなのである。

このことを考えた時、文章や口述の評価を決定する要素は、文章表現能力に加えて、どのような「考え」に基づいて「何を」「表現する」かである。高等教育機関の学生の課題、さらに彼らが社会で必要とされる能力を鑑みると、その「何か」とは、過去を印象的に表現するものではなく、未来に向けて何をしなければならないかという「政策」「戦略」であり、さらにそれは「独創的」を持ったものでなければならない。

五、提案する文章の実践例

筆者はこの提案ということに絞って、専攻科1年「国語表現演習Ⅱ」の授業において小論文指導を行っている。

授業の始めに、上位のごとくの高等教育機関においてあるべき小論文のスタイルについて話し、「新たな提案」をおこなう、ということを強調した。「国際」という大きなテーマを掲げて、どの視点からでもいいから小論文を書いてもらった。システム工学専攻のM君の文章を掲げる。平成18年度の後期の授業である。

世界の中の日本

日本は欧米にばかり目を向けていて近隣諸国であるアジアとの関係をないがしろにしている節がある。

(1) そこで日本は、近隣諸国である中国や韓国を始めアジア諸国との関係を、現在よりもより強固なものにする。④特に中国や韓国においては、領土などの外交問題や過去の歴史問題があり、簡単に解決するものではないが、どんどんと先送りにしていても解決するものでもない。したがって、⑤国際世論や国際司法裁判所等に訴えるなど、また懇談や会議を設けて早期に解決できるように努力すべきである。そして、北朝鮮をこれからどのようにしていくかなど話をより突っ込んで話し合いができる。

欧州が、欧州連合(EU)を創設し、通貨や労働

などの経済の境界や渡航のときのビザ、パスポート等の枠組みを緩和し、関係強化をはかり、ひとつのビックマーケットになり、国際競争力をつけてきている。たとえば、エアバス社である。これは飛行機を欧州内で、分割して製作していることがあげられる。

日本も、アジアのトップとして、③率先してアジアの経済やその他の協力関係を構築していかなければならない。(2) そして、欧米に対抗する一大協力体を作る。その協力体にASEANやAPECなどがある。しかしこれは、日本も含まれるが、東、東南アジアの地域を主としたものではなく、東南アジアや太平洋諸国の協力体である。

急激な経済成長をする中国、インドに対して、経済や軍事等々の面で世界中が、その注目は日本を通り越して注がれている。頭打ちの日本に対し、これからは成長を続ける中国、インドは、世界の大きなマーケットになる。

日本は先進国として、アジアのトップとして、大きな役割を担っていかななくてはならない。そうでなければ東シナ海のカス田のように、その地位が中国に奪われてしまい国際世論のなかで、日本という国が埋もれてしまうだろう。

傍線部分の

(1) そこで日本は、近隣諸国である中国や韓国を始めアジア諸国との関係を、現在よりもより強固なものにする。

(2) そして、欧米に対抗する一大協力体を作る。の二つしか提案がなされていない。その一方で(1)は、

④ 特に中国や韓国においては、領土などの外交問題や過去の歴史問題があり、簡単に解決するものではないが、どんどん先送りにしていても解決するものでもない。

⑤ 国際世論や国際司法裁判所等に訴えるなど、また懇談や会議を設けて早期に解決できるように努力すべきである。

⑥ 率先してアジアの経済やその他の協力関係を構築していかなければならない。

という「ものではない」「べきである」「なければならない」という、一見提案に見えるが、実は抽象的な意見や勧誘でしかないことが記されているのみである。

そして、その後も提案がすぐにされているわけではなく、現状説明がなされるのみである。このような現状の説明は「新たな提案」の対極にあると考える。それは、現状を説明しておけば、自らの提案を述べる必要がないからである。つまり、それは自らの提案を提示できない気弱さになる。これが、口述であるならばなおさらであることは容易に想像がつく。これでは、新たなことが十

分に示されているとはいえないし、さらにその論が深まっているともいえない。

次は、そのような指摘をした後に、M君が第二稿として提出したものである。

日本とアジアの連携強化

日本の外交は、先進国として明確なスタンスを打ち出せないまま、現在までに至ってしまっている。さらには、アジアの中でも中国・インドという大国が急激な経済成長を始めている。それに伴い世界の目は、より影響力の大きい方へ向き始めている。日本はこれまで欧米の方向ばかり向いてきた。そのために、より近隣であるはずのアジアとの関係を、比較的軽く見てきていた。(1) これから、より経済発展するアジアとの関係を強化して、日本の存在感をアピールすることを目的に日本外交の明確なスタンスを打ち出す。

現在、国境を越えた経済発展が進んでいる。①国際的な競争力を増すために作られた欧州連合に対抗し、またそれ以上の競争力を持つ協力体を設立する。②協力体となる国々はアジアを主体とする。このように構成することで日本とアジア関係の強化が図れることが考えられる。協力体を作る事により、世界の工場となっているアジアの諸国の地位向上とアジアの欧米に対する技術・生産力などの面で国際的な競争力が上がる事が期待できる。

協力体を設立するに当たって、(2) 政治や経済の基盤整理等の多大な事前準備が必要になる。したがって、①参加国それぞれに準備機関を設立する。準備期間があることで協力体への移行時、また始スタート時に潤滑な発進、混乱が発生しないことが期待できる。協力体発足ためには、種々(例えば経済や治安等)の協議が必要であると考えられる。したがって準備機関には、②日本では各省庁の人間のほか、各方面の識者等で構成されるようにする。③各国のこの機関で、協力体の骨格となる憲章や国章等を決める懇談会、会議等を逐次開催し万全の準備態勢をとる。協力体発足後、準備期間は不必要になるので解散をする。④しかし各国との窓口が必要となるので、外務省をメインの受け皿とする。

(3) 国連本部のような、国に属さず協力体を統括する機関を設立する。①協力体の争いごとの仲裁や食糧支援、開発援助などの仲介業務などの協力体に関する事を、統括機関はほぼ全般的に行う。②本部や中央銀行・その他等の重要な機関は、機関招致合戦になったりする事やテロ等の標的になる事を避けるために、一箇所集中型にせず一カ国一機関程度の分散型にする。これにより、地震などの自然災害やテロや紛争などの人為的な災害等で、その主たる

機能が果たせなくなった場合に、そのほかの場所にある機関で臨時として損傷を受けた機関の機能が果たせる事が期待できる。バックアップ体制としてそのような構造にしなければならない。

(4) EUで導入されている単一市場制度を導入し、人・モノ・お金の移動を自由にし、隣へ仕事に行くような感覚にする。①そのために、パスポートがあればビザなしで、今までよりも気軽に協力体の国を移動できるようにする。パスポートのみで入国できるようになると、日本へは不法就労を目的にした物や犯罪目的の入国が増える可能性があることが考えられるので、②入国の際により厳しい入国管理を行う。例えば、指紋や顔データをデータベースと照合し、そのデータを保存しておく。社員としての入国の際は、外務省と所属企業の証明書等を所持する事で、入国管理をスムーズに行う。観光客を増やすこともできるので、政府が増加させたいと考えている観光客とその観光収入の増加が期待できる。

(5) 関税は、協力体内の経済発展の妨げになるので廃止する。このようにする事により優れた物が売れ、そうでない物は売れなくなる。これは酷いようにも見えるかもしれないが競合すると言う競争力が生まれてくる。たとえば、日本の小規模生産者、製造者などは、破綻するかもしれない。その時は、政府は支援をできる限り行くと共に自助努力を期待する。もし、他国が日本と同様のレベルまで技術や経済水準が上昇した場合、物価も上昇し再び競争ができるようになると考える。

協力体になった場合には、通貨の互換性が少なからず必要である。(6) したがって、最終的にはユーロのような共通通貨を導入する。①旧通貨は新通貨を導入した後、5～7年程度をめに、新通貨と置き換える。ただ、現在の状態では、各国の貨幣価値、物価がまちまちであるので、②この格差の解消のために世界銀行のような、中央銀行を導入して、統一的な金融政策を行う。

これが実現した場合、協力体国家の総人口は、世界一になる事が予想され一大市場となり、米・欧州と同等に競って行く事が可能だろう。これを日本から提唱して行く事で、アジアや世界へ日本がアピールでき、その存在感も増す事が考えられる。

すでにタイトル自体が「世界の中の日本」から「日本とアジアの連携強化」へと変わり、「協力体」という具体性を帯びてきている。さらに(1)のみを挙げると次のように、論の深みを持って来ている。

(1) これから、より経済発展するアジアとの関係を強化して、日本の存在感をアピールすることを目的に日本外交の明確なスタンスを打ち出す。

①国際的な競争力を増すために作られた欧州連合に対抗し、またそれ以上の競争力を持つ協力体を設立する。

②協力体となる国々はアジアを主体とする。

ただし、例えば、「設立」の方法が、いまひとつ不鮮明である。

さらにそのような漠然とした立論をさらに明確にすることを指示した。次はその第三稿である。

日本とアジアの連携強化

日本の外交は、明確なスタンスを打ち出せないまま、現在までにいたっている。さらには、中国という大国が急激な経済成長をしている途中である。首相が変わり、若干ではあるが、東アジア諸国との関係もよくなってきている。

(1) 国境を越えた経済発展のために作られた欧州連合に対抗するような、協力体をアジアでも設立する。①この協力体を設立するに当たって、各国に準備機関を設立して、この協力体への潤滑な移行ができるようにする。②この機関には、日本であれば各省庁の人間のほか、各方面の博識者等で構成されるようにする。各国のこの機関で、③協力体の骨格となる憲章や通貨等を決めるための会議を開催する。④特に重要な決定や問題に対しては、この機関を通して事前におおむねの合意をし、世界、国内にその協力関係を強調するために首脳会談を開催して、アピールする。協力体発足後、準備期間は解散する。しかし各国との窓口が必要であるので、⑤各省庁から数人ずつで構成される機関を、内閣府の中に設立する。国連本部のような、統括する機関を設立する。これは、⑥各国の上に立つ機関にする。⑦本部や中央銀行、その他の重要な機関は、一カ国に集中せず、一カ国一機関程度の分散型にして機関誘致合戦を防ぐ。これによって、地震などの災害やテロなどの標的になり、その機能が果たせなくなったときに、そのほかの場所で臨時としてその機関の機能が果たせる。

(2) EUで導入されている単一市場制度を導入し、人・モノ・お金の移動を自由にし、隣へ仕事に行くような感覚にする。①そのため、パスポートがあれば、ビザなしで、協力体の国を移動できるようにする。②関税は、経済発展の妨げになるので廃止する。そのようにすることによって、たとえば、日本の農業などは、破綻するかもしれない、しかし、その分同盟国に頼る。そうすることによって輸出している同盟国は、重要な資金を調達するお得意様になる。つまり、国により何をするか役割分担をし、その国の得意な分野を伸ばせばよいという事である。

協力体になった場合には、通貨の互換性が少なからず必要である。したがって、(3) ユーロのような共通通貨を導入する。①旧通貨は新通貨を導入した後、5年程度をめどに、新通貨と置き換える。ただ、現在の状態では、貨幣価値が各国まちまちであるので、②世界銀行のような、中央銀行を導入して、統一的な金融政策を行う。

(4) 経済協力等の援助支援は、協力体の本部を通して行う。これは金銭的な支援ではなく、人的または技術的なものにする。①そしてその運営方法や経済的な自立ができるようになるまで完全なバックアップを行う。これは、日本が現在までに行ってきたODAが、対外的な見目をよくするために現地¹の状況を調査せず箱物だけをつくり、現地の運営手腕や技術レベルが低いために、有効に使用されなかったり、資金難で閉鎖されたりしてしまっている現状を踏まえたものである。②日本は、技術に優れているので退職してまだ働くことのできる元気な方を、有志として募集し、青年海外派遣隊のように派遣し、技術伝承をしてきてもらう。このようにすることで有効な人材活用ができる。また、派遣期間は最長で1年にし、個人の負担を軽減する。

日本人は、お金を持っているとのイメージがあると考えられ、誘拐やその他の事件に巻き込まれる可能性が高い。したがって、(5) 各国の警察のレベルを上げるために、レベルが高い日本や韓国が率先して、勉強会を開いたり、人材を派遣したり、人材の受け入れをする。①そのほかとしては犯罪者の引渡し協定等を結び、海外逃亡した可能性のある犯罪者、国際的な危険人物等のデータを共有し、犯罪者逮捕を円滑にする。各国にまたがる場合の犯罪は、国を超えた合同捜査をできるようにする。

まだ改良点は、数多くあるだろうがこのようにすることで、日本のこれまでにないはっきりとしたスタンスが打ち出せ、世界へのアピールになるだろう。

(1) が次のようにさらに持論を盛り込んでいる。

(1) 国境を越えた経済発展のために作られた欧州連合に対抗するような、協力体をアジアでも設立する。

①この協力体を設立するに当たって、各国に準備機関を設立して、この協力体への潤滑な移行ができるようにする。

②この機関には、日本であれば各省庁の人間のほか、各方面の博識者等で構成されるようにする。

③協力体の骨格となる憲章や通貨等を決めるための会議を開催する。

④特に重要な決定や問題に対しては、この機関を通

して事前におおむねの合意をし、世界、国内にその協力関係を強調するために首脳会談を開催して、アピールする。

「協力体」の構想がより鮮明になっている。語句の選定がまだ曖昧であることはひとまず置いておいて、まず勇気を出して「これからの提案」をしてみることが重要なのである。あるいは、「これからの提案」ということを明確に絞るためにこそ、語句などの問題に触れないでおく必要がある。そうしなければならないほど、「どのように書くか」ということばかりに力が注がれた今日までの作文教育には、ショック療法が必要なのでないか。

結びに代えて

語句に関する思考をひとまず停止するとしたが、実は「よい文章とは、よい論理を有する」という考えに立てば、まず、新しい提案を、論理的に構成してみることなのである。あじけない表現であってもいいからそれを箇条書きにすることなのである。そして、最後にそれを単純にあわせてただけでそれは「簡潔な文章」となるのである。

そこで始めて、議論が開始されるのではないか。先の例でいうと、

アジアでも欧州連合のようなものが可能なのか。例えば、歴史的背景を比較すると条件は、一緒ではないはず。

という反論が可能となる。その時、始めて、

歴史的背景を踏まえたアジア連合の構想

というさらに的を絞った論が構築されていくはずである。

こう考えて、「優れた論理性」をもった文章が「優れた小論文」であるという前提にたてば、小論文の授業とは、それぞれの専門のなかにおいて、行われるべきなのである。それぞれ専門のなかで、

①問題を見つけ、

②それが独創的なものであるかを確認し、

③それが未来に対する提案になっているか、

を学会の動向や、それと直結している社会の分野のなかで、推敲しながら、さらに議論しながら、すり合わせていく文章こそ学生に求められている小論文なのである。

注

1) 『日本語の作文技術』で「作文の時間そのものが、たとえば私たちの小学校時代より少ない上、読書の「感想文」などを書かせているのだ。このような日本の教育環境もまた、いまの日本に非論理的文章の多い現象の一因であろう」とするように、感想文教育によって、日本人は非論理的作文を書くようになったという。

- 2) 「毎日、本を読むか、運動をするか、昼寝をするかなど、選択が可能な場面で意思決定をしなければならない」という状況が、本当に存在するのかという問題も残る。さらに、「子どものころから、自分で問題を発見」する子どもがいるのかという問題も残る。
- 3) これらが、それぞれレベルの違う問題であって、文章としては、ポトフ状態になっていることも問題である。また「同じものを食べる」と「一体感を生み出し」「学校生活が楽しくなる」という視点が有効かということも問題である。第一の「一体感」は問題本文中の「教育の一環」「心身の健康な発達を図っていくこと」「みんなで一緒に食べる昼食」を具

体的に例示しただけで、「栄養の問題」にしても、「学校給食は、貧困児童の血色対策として始まった」という給食の始発を現代の偏食に当て嵌めて指摘しただけである。

- 4) 自らの思い出が少し多いのが気になる。というのも、学生に例えば、就職や編入学の志望動機などを書かせると、自分がなぜその教科に興味を持ったかを、例えば、中学校の時の思い出を交えながら書くからである。確かに具体的な事例は必要である。ただ、恐らくこれが、小学校の作文と、中学校以上の小論文との違いであるが、そこに「私」が出るかでないかの違いである。その点において、「作成例2」は社会現象として捉えていない。

How to Propose a Title for an Essay at College

Yasuo ONO

This essay aims to instruct students as to the best way to prepare an essay in Japanese. While at elementary, junior-high and high school emphasis falls on the underlying idea, at higher education educational institutions emphasis is on the logical construction on the essay.